

経営情報学科

キーワード

経営史、経済史、企業者論、自己目標管理



教授 / 経営学修士

藤田 幸敏

Yukitoshi Fujita

学歴

専修大学大学院 経営学研究科 経営学専攻 修士課程
 専修大学大学院 経営学研究科 経営学専攻 博士後期課程（満期退学）

経歴

愛知学泉大学 経営学部 専任講師、助教授、教授
 愛知学泉大学 現代マネジメント学部 教授

相談・講演・共同研究に応じられるテーマ

日本企業の発展史
 日本の企業家

メールアドレス

yfujita@fukui-ut.ac.jp



主な研究と特徴

「陶磁器業の流通史」

陶磁器産業と言えば日本に古くから存在する産業であり、その製品としては伝統的な食器類を思い浮かべる人が多いだろう。そのため、陶磁器業が日本資本主義の発展に寄与した貢献度については、あまり意識されていないように思われる。しかし日本資本主義の黎明期である明治において、陶磁器製品は重要な輸出品であり、日本の発展に欠かせない外貨獲得に重要な役割を果たした。また陶磁器製品の輸出は以後も増え続け、1930年代の後半にピークを迎えるなど、強い国際競争力を有していた。その後、戦時体制下において陶磁器輸出は停滞するが、戦後の1950年代には主要輸出国であるアメリカ輸入市場において、イギリスや西ドイツを超える最大市場シェアを有していた。すなわち陶磁器産業は、日本資本主義発達史を語るうえで欠かせない産業なのである。

ところで、陶磁器産業は確かに重要な輸産業であったのだが、その輸出シェアは多いときでも50%ほどであり、言い換えれば50%の陶磁器製品は国内に流通していたことになる。そして、陶磁器製品の国内流通には問屋組織の存在が欠かせないが、産業の特殊性を反映した流通組織は複雑である。

一方、輸出においても貿易摩擦ともいえる事態が発生する中、輸出カルテともいえる組合の指導者がリーダーシップと調整力を発揮し、輸出拡大を実現してきたという歴史もある。現在は国内外の市場で売り上げの減少傾向にある陶磁器製品であるが、今後の流通政策を考える上でも、先人たちが作り上げた制度の合理性と存在意義を問いつつ、企業者活動としての活動を描くことには重要であると考ええる。

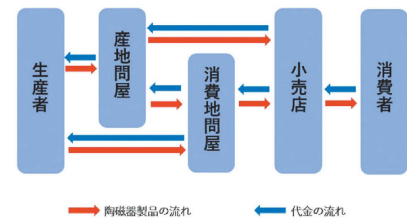


図1. 陶磁器国内流通の事例（生産者が中小規模のケース）

「働く者の尊厳を保障するマネジメント」

今日、マネジメントの発明者として評価されるP.F.ドラッカーの理論は、経営学の中に位置づけられることが多いように思うが、それは妥当であろうか。そもそもドラッカーは経営学者であろうか。ドラッカーは生涯を通じて「維持と変化の相克」を研究し、その背景には市民の自由と尊厳を重視する思想があった。そのことを前提としない限り、ドラッカーへの正当な評価は成し得ない。その点、ドラッカーが提唱した目標管理は、組織構成員の自由と尊厳を保障する手法としての意味を持つが、ドラッカーが、そのために構成員に求めたものは「責任」と「自ら考えること」であり、それなくして目標管理を正当に評価することはできないし、それがドラッカーの意図した効果を発揮することはないだろう。

ところで、目標管理の提唱者としてはD.マクレガーも上げられる。しかしドラッカーの目標管理が人間の尊厳を保障することに重点があったのに対し、マクレガーの場合は自己実現欲求に対応するものであった。これに関連して、欲求五段階説の提唱者A.H.マズローはドラッカーやマクレガーの目標管理に言及し、マクレガーを評価するのに対してドラッカーには批判的である。これにドラッカーは反批判を行い、自らの目標管理の意義を明確にしているが、そこから分かるのは、人間の尊厳を保障するマネジメントと自己実現欲求を満たすマネジメントがいかに異なるかということと、人間が自らの尊厳を守るための、働くものの自身への厳しい要求である。人間の尊厳を保障するマネジメントには、マネジメントの方法と共に、働く者の自覚こそが重要なのである。

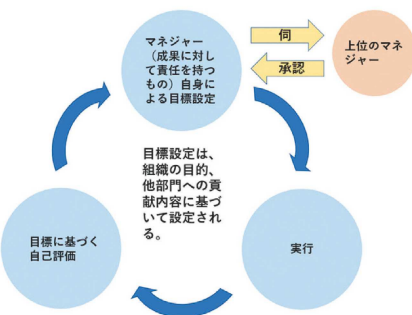


図2. ドラッカーの提唱する目標管理の概念図

今後の展望

「陶磁器産業の流通史」に関しては、現在、特定地域の産地問屋に関する研究が一段落したところである。今後は、同様の産地問屋に関する研究を地域的に広げるとともに、消費地問屋の研究が必要である。産地・消費地の問屋、双方の実態を歴史的に明らかにすることで、陶磁器国内流通の全体像が描き出せるだろう。同時に、輸出面についても調査を進めていく予定である。とりわけ戦後のディナーウェア輸出においては、輸出カルテルと位置付けられる日本陶磁器輸出組合の活動が重要であったことが明らかにされており、問題解決にあたっての制度と取り組みが明らかにできるだろう。

「働く者の尊厳を保障するマネジメント」に関しては、欲求五段階説の提唱者、A.H.マズローが、自己実現欲求を満たすマネジメントを論じたとして、P.F.ドラッカー、D.マクレガー同様に評価するR.リッカートの連結ピン理論を、本研究の問題意識に沿って再評価することが、最優先の研究課題となる。また自己実現を満たすマネジメントについてはマズロー自身も論じているが、こうした4者4様の理論を比較検討することで、働く者の尊厳を実現するマネジメントとはいかなるものであり、いかなるものが要求されるのかを明らかにしていく。

所属学会

経営史学会
 社会経済史学会
 日本経営学会
 経営学史学会
 企業家研究フォーラム

主要論文・著書

糖業協会編、藤田幸敏著『戦後日本糖業の発達と糖業協会』丸善ブライネット、2012年

久保文克編著『近代製糖業の発展と糖業連合会』日本経済評論社、2009年（第3章、第4章担当）

藤田幸敏「陶磁器商業組合の機能と活動ー戦前から戦後の東農地区西部を中心にー」経営史学会『経営史学』56巻2号